波

三年

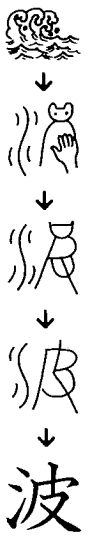
画数 8

筆順 氵 氵 氵 波

オン ハ

クン なみ

成り立ち



「ものの〝ひょうめん〟」といういみをあらわした〝皮〟と、〝水〟のいみをあらわした〝氵〟とを組み合わせて作った字です。

「水の〝ひょうめん〟にあらわれる〝なみ〟」をあらわした字です。

今では、「水のひょうめんにあらわれる波」にかぎらず、「波のようなうごきをするもの」をも〝波〟というようになりました。例音波、電波。

〔波の音〝ハ〟は〝皮〟に因る。〝皮〟は〝ヒ〟だが〝同行相通〟で〝ハ〟に変化する。〝披・被・彼・疲〟などは〝ヒ〟であり、〝波・破・跛〟などは〝ハ〟と発音する。〕

使い方

▽海がんにうちよせる波を見ていると、ふしぎな気がします。この波は、はるかむかしから、同じように、この海がんに休みなくうちよせて来ているのです。わたしたちのいのちも、この波にくらべると、わずかいっしゅんのように、かんじられます。

▽台風の余波で、海上は大あれとなっています。船などは、よほど用心しないと、ひっくりかえってしまいます。

熟語例

▽余波（風がおさまったあとでも、立っている波）

▽波紋（水の中に、ものをなげこんだときに広がる波のもよう。また、そこから、なにかをして、そのえいきょうが広がること。「そのじけんは、社会に大きな波紋をなげかけた」などというふうに、つかいます。）

▽波及（なにかのえいきょうが、波のように、広がって行くこと。）

▽音波（音の波。ものがしんどうすることによって生まれる。）

配

三年

画数 10

筆順 一 丆 丙 酉 酉 酉 配

オン ハイ

クン くば＝る

成り立ち

酒を入れておくうつわの形をあらわした〝酉〟と、人の形をあらわした〝己〟とを組み合わせて作った字です。〝酒〟のあるところには〝人〟がいつもよってくるので「酒と人とはいつも〝つれそう〟」といういみで〝つれそう〟といういみをあらわしたものです。また、いつもいっしょにいるということで「いっしょにする」といういみにもつかわれます。

また、「〝人〟が〝酒〟を〝くばる〟こと」をあらわしたものとみて、〝くばる〟といういみにもつかわれます。

〔配の音ハイは、己（改）の変化したものである。己はキ→カイ、ヒ→ハイの音変化をもつ。妃の音はヒ、ハイである。〕

使い方

▽先生が試験用紙を配りました。まず名前を書いて、問題に取り組みました。

▽給食を配るのは、けっこう大変です。量が多すぎたり少なすぎたり、しがちです。時には足りなくなってしまうこともあります。そんな時は失敗したな、と思います。

熟語例

▽配偶（つれそうこと。「配偶者」といえば、つれそっている人、つまり、夫に対する妻、妻に対する夫のことを言います。）

▽配分（配り分けること。「平等に配分する」などというふうに、つかいます。）

▽配給（割り当てて配ること。「水不足の地方では、給水車が水を配給した」などというふうに、つかいます。）

▽配水（水を、あちこちに配ること。水をほうぼうの家庭に配っている管を「配水管」といいます。）

▽心配（「心を配る」ということから、色々と気をもむことのいみに、つかいます。「あしたは遠足だけれど、雨がふらないかと心配だ」などと、つかいます。）